

## 月読神社のこと

月読神社がでてくるのは、弘計天皇（をけのすめらみこと）（顯宗天皇、けんそうてんわう）三年条、487年のこと、阿閉臣事代（あへのおみことしろ）が任那（みまな）に派遣されたときのことである。阿閉（あへ）は饗（あへ）であり、この任那への派遣は、軍事的なものではなく、祭祀、饗宴の儀式に関するものであったと思はれる。

阿閉臣事代が、道中、壱岐で亀卜を行ふ宮を訪れたときであろうか、その神職か巫女に、月神（つきのかみ）が憑依して、民地（部民と土地）を奉れ。そうすれば、福慶があるだろうと告げた。高皇産靈を祖とする月神といふ。「延喜式神名帳」に掲載される「壱岐郡月読神社」の祭神とされる。このことを弘計天皇の近飛鳥八鈎宮に報告すると、その条件を容れて、歌荒櫛田（うたあらすだ）を奉ろうとなった。

日に対する月、對馬に対する壱岐、飛鳥に対する山背とでもなるのか、山背が選ばれ、山背國の葛野郡にある部民と田を奉った。“うた”は宇田（良い土地）、これを歌とし、“あらす”は生（あ）らす、これを荒櫛とした。

荒洲は、「未開拓な中洲に開かれた田」でもあり、洪水に沈みやすい中洲は神の領分とされ、無税の神田が開かれ、そこからの収穫物は聖域の整備に充てられた（高橋秀元氏、編集工学研究所）という。大堰川沿いであろうが、上野村、桂里、有栖川流域など諸説があり、特定されていない。

壱岐で月神を祭っていた神職が招かれ押見宿禰の姓（かばね）を賜った。葛野坐月読神社（京都市西京区松室山添町）の起源であり、亀卜がもたらされたとされる。中国では殷の時代から甲骨を使って卜占が行はれており、我が国にも骨を使う方法が伝はっており、魏志倭人伝に、「骨を灼（や）きて卜し、以て吉凶を占い、先ず卜する所を告ぐ。その辞は令亀の法の如く・・・」とある。鹿の肩甲骨を用ゐるものを太占（ふとまに）と称した。亀卜はそれよりも優れたものがあつた。

三年連続で曲水の宴が記されており、儀式や歌舞に対する関心が高まっており、同様に、亀卜への関心が高まっていたのであろうか。

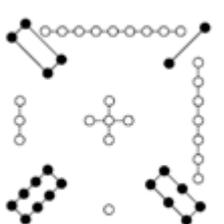
三年の春二月の丁巳の朔（487.02.01）に、阿閉臣事代（あへのおみことしろ）、命を銜（う）けて、出でて任那に使す。是に、月神、人に著（かか）りて謂（かた）りて曰はく、「我が祖、高皇産靈（たかみむすひのみこと）、預（そ）ひて天地を鎔（あ）ひ造（いた）せる功有（ま）します。民地（かきところ）を以て、我が月神に奉（つかまつ）れ。若し請ふ依（まま）に我に獻らば、福慶あらむ。」事代、是に由りて、京に還りて具（つぶさ）に奏（まう）す。奉るに歌荒櫛田（うたあらすだ）を以てす。【歌荒櫛田は、山背國の葛野郡に在り。】壹伎縣主（いきのあがたぬし）の先祖（とほつおや）押見宿禰（おしみのすくね）、祠（まつり）に侍（つか）ふ。

三月上巳（03.03）に、後苑（みその）に幸（いでま）して、曲水（めぐりみづ）の宴（とよのあかり）きこしめす（日本書紀）。

今度は、阿閉臣事代が、對馬の亀卜の宮を訪れると、日神が場所を指定し、磐余の田を高皇産靈に獻

るよう告げられた。高皇産靈といえば、對馬の高御魂神社となる。このとおりに磐余に田十四町を獻り、神職が對馬の下縣より招かれ對馬下縣直を賜った。對馬下（津島）縣直は、龜卜に秀でた族である。延喜式・臨時祭の条に、「卜部は三国の卜術に優れた長者を取る（伊豆五人・壹岐五人・對馬十人）」とある。田十四町の地は、式内・目原坐高御魂神社（橿原市）に比定されている。福慶とは結局、中央政權が龜卜を導入しえたこととしか読めず、その起源となった伝承とみるほかあるまい。

中国には、河圖洛書の伝説がある。易に、「河（黄河）、圖（黄河の龜の甲羅の文様）を出し、洛（洛水）、書（洛水の龜の甲羅の文様）を出して、聖人之に則る。（易經「繫辭伝」：圖書）」とある。洛書の甲羅の模様は9つの数字とされ、「天すなわち禹に洪範九疇を錫（あた）う（書經、洪範）」とされ、九つの秩序をあきらかにし、世を治める指針とされた。骨の割れ目で可否を占うよりは、はるかに複雑な判断を要する。

	4	9	2
	3	5	7
	8	1	6

4: 五紀(歳・月・日・星辰・曆数)	9: 五福を嚮用し、六極を威用す。	2: 五事(貌・言・視・聴・思)
3: 八政(食・貨・祀・司空・司徒・司寇・賓・師)	5: 皇極を建用す	7: 稽疑を明用す(卜筮)
8: 庶徵(雨・暘(陽)・燠(暖)・寒・風)	1: 五行(水・火・木・金・土)	6: 三徳(正直・剛克・柔克)

中国は河川の龜であるが、對馬では海龜でそのまま当てはまるものではないのだが、これを習得することが求められたのかもしれない（[詳細は龜の記憶](#)）。

夏四月の丙辰の朔庚申（04.05）に、日神（ひのかみ）人に著りて、阿閉臣事代に謂りて曰はく、「磐余（いはれ）の田を以て、我が祖高皇産靈に獻れ。」 事代、便（すなは）ち奏（まう）す。神の乞（こはし）の依（ま）まに田十四町を獻る。對馬下縣直（つしまのしもつあがたのあたひ）、祠に侍ふ。○戊辰（04.13）に、福草部（さきくさべ）を置く。○庚辰（04.25）に、天皇、八釣宮に崩りましぬ（日本書紀）。

ニュース解説にすれば、阿閉臣事代は任那への派遣に際して、壹岐と對馬における龜卜を導入すべく交渉を行い、壹岐郡月読神社、對馬の高御魂神社の合意を得た。八釣宮の政權は、山背國の葛野郡歌荒櫨田を提供し、壹岐の神職を招き押見宿禰の姓を賜うこと、ならびに、磐余に田十四町を提供し、神職を對馬の下縣より招き對馬下縣直を賜うことで合意した。壹岐、對馬としては姓（かばね）を取得し、その地での地位を確かなものにした、とでもなるう。

今の人はそので済むが、この時代はそうはゆかない。この神託の主、月神、日神は如何なる神か。高皇産靈も我々が奉じている神と同じなのか、阿閉臣事代が念入りに確認をし、我々の信ずる神の神託であるとしており、そうである限りは、その神託を実現せねばならない。部地を用意するのはいいが、誰が祭るのか？對馬と壹岐でその神を祭っている神職を招いたということからすれば、天皇家が祭祀する筋合いにない神である恐れがあった。

月神と日神は、古事記と日本書紀（書紀）とは全く異なる。

古事記では、伊耶那岐命が出雲の黄泉の国から帰り、筑紫日向の橘の小門（をど）の阿波岐原（あはきは

ら)で身体の汚(けが)れの禊を終えて、左目を洗うと天照大神、右目を洗うと月読命、鼻を洗うと建速須佐之男命があらわれたとする。

書紀では、伊弉諾尊と伊弉冉尊の二人が、磯馭慮嶋(おのごろしま)で、国(洲)や山川草木を二人で生んだ後に国の主をつくろうとして、大日靈(おほひるめのむち)、別名、天照大神(あまてらすおほみのかみ)、天照大日靈尊(あまてらすおほひるめのみこと)、そして、月弓尊(つくゆみのみこと)、別名、月夜見尊(つくとよみのみこと)、月讀尊を生まれ、この二人は光輝いており、それぞれ日神、月神として、柱(磯馭慮嶋)を伝って高天原に上げられ、続いて、蛭兒(ひるこ)、素戔鳴尊を生まれたとしている。

高皇産靈はいささか複雑である。

古事記は、「天地初めて發(ひら)けし時、高天(たかま)の原に成れる神の名は、天之御中主神(あめのみなかぬし)の神。次に高御産巢日(たかみむすひ)の神。次に神産巢日(かみむすひ)の神。この三柱の神は、みな獨神(ひとりかみ)と成りまして、身を隠したまひき」とする。

書紀は、國常立尊(くにのとこたちのみこと)、國狹槌尊(くにのさつちのみこと)、豐斟淳尊(とよくむぬのみこと)の三神、獨り神で男神が、この順番で天地の中に生まれたとしており、一書に、「天地初めて判るときに、始めて俱(ともに)生(なりいづ)る神有(ま)す。國常立尊と號(まう)す。次に國狹槌尊。又曰く、高天原(たかまのはら)所生(あれ)ます神の名(みな)を天御中主尊(あまのみなかぬしのみこと)と曰す。次に高皇産靈尊(たかみむすひのみこと)。次に神皇産靈尊(かみむすひのみこと)。皇産靈、此をば美武須毘(みむすひ)と云ふ」と伝へている。「預(そ)ひて(～と並んで)天地を鎔(あ)ひ(型にいれて鑄造する)造(いた)せる功」とは、國常立尊と國狹槌尊に並んで、天地を形作った功績といふことになる。

この一書は、天地が初めて別れたとき、地では國常立尊と國狹槌尊が、高天原では天御中主尊と高皇産靈尊ならびに神皇産靈尊がともに出現したという解釈であり、天御中主尊と高皇産靈尊は伊弉諾尊伊弉冉尊とは別系統とする考へ方があった。日神と月神は地上で生れられ、天上に上げられた神であるが、高皇産靈尊は天地が別かれたときに生まれられた神で立場が異なる。ここでは、月神と日神が高皇産靈尊をわが祖とし、代理となって神託を行う形となっている。

高皇産靈尊は、窮地を打開する際に知恵と力を発揮する神である。天照大神が岩戸に御隠れになられたとき、子の思兼神が知恵を出し、岩戸の前で歌舞饗宴を行ひ、天照大神が覗こうとされたところ、手力雄神が岩戸を開けた。大国主命に国譲りを納得させたのも、瓊瓊杵尊を眞床覆衾にくるみ天から地へ降ろされたのも、丹生の川上で磐余彦尊(神武天皇)に降りて天下の平定を約されたのも高皇産靈尊であるが、天上から救援をされたもので、月神とともに、地上に降りられたという記述は書紀にはない。

ではいつ、月神が壱岐に、高皇産靈尊が對馬に降りておられたのか。

天照大神が伊勢に降りられたというのも妙なものである。国の主として生みだされた神ならば、国の中心に降りられるのが筋である。その神を生まれた伊弉諾尊と伊弉冉尊もそこに祭られるべきであるが、伊弉諾尊は淡路島、伊弉冉尊は出雲の根の国(黄泉)で不遇の極みとなっている。国譲りをされていながら、瓊瓊杵尊が降りられたのは九州の高千穂というのも変である。そうせねばならない現実があった。

神話とて現実を反映している。

では、對馬や壱岐に降りておられた月神、日神、高皇産靈とは如何なる神であったのか? 常識的には、

古事記や書紀に記される以前からおられた神で、月神、日神、高皇産靈に置き換えられた神とでもいう他あるまい。

壱岐の月神は、地母神の系譜をもち、海人の伝承する神であったようだ。「縄文時代から月神は農神、植物神として地上の一切を司る『地母神』として深く信仰され、特に誕生と死が、月の引力と潮の干満とが深くかかわる事が認識され、人体のほとんどが水分で占められ体内の水分が月の引力が影響を受ける事などから女神であったように思われます。また、後世には男神となり月讀尊は潮の八百重（やほへ）を治すべし（海を治めよ）に入れ変わっています。（月神の変遷；月読神社）」といふ。

對馬における日神を、阿麻氏留神（あまてるかみ）としている。太陽信仰はどこにもある、卑弥呼の時代の對馬では、魏志倭人伝によれば、大官を卑狗（ひこ：日子）としている。對馬には、古い俗神に「おひでりさま」があり、原始的な日の神信仰で、照日の神といふのもあるそうだ。

「おひでりさま」は、「神社の形式から外れていて、祭りも絶えた所が多く、名称も廃れかけているが、古い習俗をよく伝えてきたものである。これはその名のごとく日照りの神で、禁忌に振れると祟りがきびしいという。神威の高い神だったに違いない。このお日照りの神と、天照る神と、照日の神は、もともと同一神ではないかと思われる。それなのに天照神のみが官社となり、お日照り様は俗神として神社の列にさえ入らず、また照日の名は伝説の中に埋もれてしまった（<'つ'の研究（3）継続>『海神と天神』永留久恵著：「街道をゆく」外伝）」といふ。

高皇産靈は、對馬における「高雄むすぶの神」、「神躰石」と思われる。「対州神社誌」の醴豆（つつ）郡醴豆村の条に、「高雄むすぶの神。神躰石。昔醴豆崎に浮候 うつお舟有り。獵船差寄見候得は、内に石ありて奇怪に光を以、取帰って祭るといふ俗説有り、不可考」とあり、「豆酸の俗称ではいまも“たかおむすぶ”という。これは古来の『高御魂』の訓みに違いなく・・・“ムスビ（イ）”という言葉には、産靈という言葉が宛られたように、神靈を産む働きが秘められている。ムスは『産す』ことで、ヒは『靈（ひ）』と説かれている。・・・折口信夫は、ムスビとは靈魂を鎮呪することによって神を出現させることで、タカミムスビ・カミムスビの二神はこの鎮魂の秘術によって多くの神を産んだ創造の神であるという意味のことを述べている。・・・

豆酸では現在も原始的な赤米の品種を連綿と伝え、厳格な神事としてこれを耕作し、その穀靈を祭っている。今ではこの天道神事に高御魂は直接関係しないようだが、古くは高御魂が無縁であったはずはない。たとえば新穀を俵に詰めて『魂』を入れる『神様作り』という神事があるが、この入魂の呪術こそ産靈（むすび）の神の本領だったはずであり、神仏習合の後に真言密教の作法に改まったものと思われる（前掲書）」とされる。

結果をみてみよう。

「続日本紀」大宝元年（701）条には、「勅により月読神、樺井神、木島神、波都賀志神等の神稻は今より以後中臣氏に給へ」とあり、磐余に高皇産靈神を祀った對馬下県直の末裔は、大宝律令制定以降、中臣氏に吸収されたといふ。

對馬の高御魂神社自体は、「樞原の朝高皇産靈尊の五世の孫津島県直建弥己々命に詔して天神地祇を祭らせ給ふ処にして、神功皇后三韓に向ひ給ふ時行宮を定められ御親ら戦捷祈願し給ひし社なり、高皇産靈を祀る社は全国にも稀にして佐護の神皇産靈を主基の宮、本社を悠紀宮として上古由緒ある社にして顕宗天皇三年四月、上より神田十四町を献上せられた。神事造営は上より行はれ国主の崇敬篤き社なり。

延喜式神名帳に載る名神大、高御魂神社は是の社なり（玄松子）」となった。

阿麻氏留神社は、「天日神命（ヒニミタマ；ヒノミタマか？）。津嶋縣直の祖神として、『神名帳考證』にも阿麻氏留神是天日神命也とあり、『特撰神名牒』は、山城の天照御魂神社、丹波の天照玉命神社等と同じく、当社も天照國照彦火明命なるべし、と考定してゐる。阿麻氏留といふのは天照であり、それは本来この地方の神名で、“天照神” だつたのではないか。それはまた照日神（テルヒノカミ）とも称したことは、『対馬神社誌』に明らかである－『式内社調査報告』－（玄松子）」となった。

つまり、この日神は、天照大神でなく、天日神命（あめのひのかみのみこと）であり、それは天火明命（あまのほのあかりのみこと：天忍穗根尊と高皇産靈尊の女（むすめ）栲幡千千姫萬幡姫命との子）、別名に天照國照彦火明命（あまてるくにてるほのあかりのみこと：天忍穗耳尊と高皇産靈尊の女（むすめ）天萬栲幡千幡姫との子）とするようになった。また對馬と関連を深めた物部氏は、「先代旧事本紀」において、それは天照國照彦天火明櫛玉饒速日尊（あまてるくにてるひこあまのほあかりくしたまにぎはやひのみこと）とした。

結果からすれば、山背の月読神社、橿原の高御魂神社の祭祀は中臣氏の手へ落ち、壱岐と對馬の社は中央政権に再編され、立場が逆転してしまい、平成の我々は、山背の月読神社、橿原の高御魂神社が本家と思うようになった。

伊耶那岐命の禊の地は筑紫日向の橘の小門、天照大神の三女は筑紫の胸肩君等に祭られ、素戔鳴尊は出雲に追放され、瓊瓊杵尊は高千穂に降りられた。天照大神は、伊勢である。どれも、当時の政権の中心、倭（奈良）からはずれている。磐余彦尊（神武天皇）は六合の中心、倭（奈良）を目指された。奈良に君臨していたのは、饒速日尊であり、神といえば、その後も、三輪の大物主神が隠然たる力を有していた。それが現実の力関係を反映していたのであろう。こういうことからすれば、月神、高皇産靈も壱岐、對馬に降りておられたのかもしれない。

壱岐、對馬の地の神を一旦受け入れ、大変な時間をかけて、いつの間にか立場を逆転してしまう。粘り強いことこのうえない、これがこの国の伝統方式なのかもしれない。しかし、この結果、月読尊、高皇産靈は本来の力を発揮することができなくなったようである。祭られる主体と祭る者の正統性が損なわれたことによる。祭るべき者が祭ってこそ祭られる神の威力が発揮される。自らの意思で自らを祭る者に降りられた天照大神の発揮された力の大きさと比すれば、その弊害は著しい。これは偶然の結果というべきか、それとも、そうならざるを得なかったのか。もし、そうであれば、一体何が起こっていたのか、そこは分からない。

2012年1月6日